

地域の高低差把握を

覇

災害フォーラム 識者が警鐘

那

東日本大震災の発生を受け、沖縄で災害が起きた際の備えについて考える「第5回県民緊急・災害フォーラム」(同実行委員会主催)が28日、那覇市の県立博物館・美術館で開かれた。琉球大学の仲座栄三教授(環境防災工学)ら識者7人が

「沖縄で災害が起きたときの備えについて」のテーマでパネル討議した。写真。

仲座教授は県内の化石を調べ、琉球列島には2500年を周期に大津波が来ていると指摘し、「いつ大津波が起ころうともおかしくない」と注意を促した。また、東日本大震災ではわずかな高低差が被害の有無の分かれ目になったと説明。参加者に自分が住む地域の高さなどの状況を知ることが大事だと強調した。

沖縄大学の稲垣暁さんは「町を歩いたり、自分で立体地図を作ることによって地域の高低差を知ることができると話した。」

